〔退職記念講演〕

社会病理学への道

佐々木　嬉代三*

はじめに
――自分史の試み――

今日は卒業生がたくさん来てくれまして，それが何よりうれしいです。佐々木ゼミの第一期生をはじめ，70年代に卒業の方，80年代の方，90年代になって卒業された方，懐かしい顔が多く，30年ぶりに顔を見る方もおられます。最終講義ではなく，退職記念講演という形式で話すことになりましたが，こんなに懐かしい人々に会えるのなら，こういう形式の方がいいな，というのが私の率直な感想です。遠くから駆けつけてきていただいて，それだけで胸が一杯です。

講演のテーマを「社会病理学への道」としましたのは，私がなぜ社会病理学という学問をやるようになったのかということと，社会病理学の学問的性格を私がどうとらえているのかということとを，重ね合わせて話したいと思ったからです。

社会病理学と言いましてもいろんな立場の人がいます。調査が好きで飛び回っている人もいます。政策マインドで実践的な問題解決を志向する人もいます。私自身は，社会病理学という学問が，兎にも角にも大好きだということが第一です。調査もいいし，政策マインドもいいのですが，それ以前に社会病理学という学問が好きなのです。人間の生きざまをストレートに考えていくという学問的な性格が好きなのです。その意味では，社会病理学との出会いは，後に定義する語を予め使えば，「運命」的であったとさえ感じています。

そこで，まず，社会病理学をやるに至った自分史を試みます。自分の過去を振り返る時，立命館大学産業社会学部の教員として定年を迎えようとしている現在に照らし合わせて過去を再構成していきますから，自分の過去のいくつかの事実をピックアップして自分自身のイメージをつくりあげていく。そういう形で自分史はあるのだろうと思います。私という物語，現在の時点から過去の出来事を組み合わせていく。これは単なるフィクションではなく，再構成された一つの物語だといえるのですが，当然のことながら，過去の事実を現在の自分に重ね合わせていく作業の中で，光の当たっていない事実は伏せられたままになるわけです。そこで，伏せられた事実を拾い上げて組み合わせれば，また別の自分史が語れることにもなるのですが，それは別の機会に譲るとして，今日こ

＊立命館大学産業社会学部教授，2005年４月１日より名誉教授，特別任用教授

こで語ろうとしているのは，社会病理学者としての自己像に合わせて，過去を見るという作業なのです。

大きくいえば，三つの出来事がありました。第一は，いうまでもなく，父と母によって私がこの世に生み出されたということ。第二は，60年代という政治の季節に学生時代を送ったということ。第三は，立命館大学に就職し，社会病理学の担当を命ぜられたということ。まず第一の点ですが，父と母の出会いは今から考えるとすごく面白いのですね。父親の父親は岩手県の下閉伊の人で，屯田兵として北海道に渡ったから，父は北海道で生まれた。母親の父親は鹿児島の薗牟田村出身ですが，仕事で東京に出てきたから，母は東京で生まれた。生まれたところは北海道と東京で，地理的にかなり離れている。階層的な地位もかなり離れていた。母は医者の娘で女学校を出ているのに，父は農家の次男ですから尋常小学校だけです。小学校を出て氷屋の丁稚奉公で働きだして，散々苦労した生活だった。地理が離れ，階層が離れた二人が一緒になった。なぜか。なぜ可能だったのか。それが，宗教の力だったのですね。皆さん，大本教を知っていますね。父と母は当時の新興宗教の信者だったのです。宗教の例に漏れず奉仕活動がある。そこで二人は出会い，父が情熱に目覚めて手紙を次々書きました。結婚する前に，母の父親が言ったそうです，今まで来た手紙を全部読めと。母が震える声で読み終わると，ただ一言，「よく仕事を変わる人だな」といったそうです。いずれにせよ，こうして二人は結婚し，北海道で生活するようになる。そして北海道で仕事のかたわら，大本教の宣伝を始める。そこに大本事件が起こります。昭和10年，大本教に対する大弾圧が始まります。昭和初年代から始まった共産主義者への弾圧が一段落し，今や国家神道に対するものとしての民間神道が狙われ，やがてはキリスト者や自由主義者に及ぶという戦前日本の暗い歴史の一端に，父と母も巻き込まれたのです。「三千世界一度にひらく梅の花，艮の金神の世になりたるぞよ」という教祖の「御筆先」に不穏な響きを感じ取ったということもあるのでしょう。今ではフレームアップだったということが分かっていますが，なにしろ国民総動員体制の敷かれる戦前の話です。非国民だと疑われた者が生きやすい道理はない。だから，「満州」の大連に渡り，そこで私が生み出されたのです。考えてみたら，父も母もドラマに満ちた人生を送りましたし，そのドラマの中で私が生まれたのですから，まあ，社会病理学へ進む種子が撒かれたようなものなのです。

学生時代。大学は６年間，大学院は５年で計11年間行きました。大学での専攻は，最初は地理学で，それから社会学に行きました。11年間いましたから，60年安保闘争と60年末の大学紛争の両方をまともに経験した時期でした。ある意味ではいい経験でした。今では考えられないような経験をさせていただきました。マルクスやエンゲルスの著作を次々読み，左翼的な言辞を覚え，読む雑誌といえば『世界』と『思想』に決まっているというのが，当時の学生の平均的な姿だったと思います。60年安保では大衆的興奮とその後の深い挫折を経験し，学園紛争では学生が学生と対立するという，愚かで暗い経験を味わいました。紛争中教室が占拠され，当時の大学院の社会学教室では自主ゼミ運動をやり，『日本資本主義発達史』などを討論していたことを覚えています。同時に，関西の社会学研究者と大学院生が一緒になって「現代社会研究会」を組織し，私は事務局の仕事をしていました。こうしたことが契機になったのでしょうが，私個人としては戸坂潤に関心を持ち，戸坂

潤の理論研究に励みました。とりわけ影響されたのは，彼の「問題の理論」です。彼は理論を，その立場によって切ったらだめだと言うのです。どんな理論にも，その理論のもとになった始原的な問題がある。その始原的な問題をとらえて理論の性格を考えなさい。彼は，立場の概念は理論を非歴史化し，平面化し，形式化する。問題の概念は理論を歴史化し，立体化し，内容化する，と語ります。だから基本になる問題をまずとらえなければいけないと。その言葉に感銘を受けて社会学をやっていましたから，社会学の原点に横たわる問題，始原的な問題は「社会と個人」の問題である。全体としての社会と部分としての個人の関係性の問題，あるいは社会の中に住まう個人の問題と，個人の中に宿る社会の問題。それがどう関係しあいながら，我々の生き方を規定しているのかを考える，それが社会学という学問なのだと思い定めて，今日まで来たのです。その意味では，戸坂潤に導かれて，社会学をやってきたのです。

そして，ドクターを出て，8ヶ月ほど立命館大学で非常勤講師をやり，1971年1月1日という珍しい日付で立命館大学に雇われました。前の年，末川先生に代わって武藤先生が総長になられましたが，大学紛争の処理に追われて過労で倒れられ，産業社会学部の細野先生が総長になられた。そこで，手近なところで非常勤をやっていた私に声がかかったというわけです。「現代社会研究会」を通して，先生方の多くを知っていたというのも有利に働いたのでしょう。立命館大学に赴任した当時には，社会問題に深い関心をもっていましたが，学部の社会問題論担当には真田是先生という立派な先生がおられ，仲村祥一先生が社会病理学をやっておられました。ところが，赴任した年の4月，仲村先生が突然立命を辞められたので，「お前，デュルケムをやっていたから社会病理をやれるだろう」ということになって，本格的に社会病理学への道を進むようになったのです。

1．社会問題と社会病理

社会病理学を担当して最初に悩んだのは，社会問題と社会病理の区別をどうつけるかということでした。「イメージとしての両者の差異」とレジュメにありますが，私のイメージでは社会問題という概念は，戦前以来「生活」の問題や「労働」の問題を基軸にしている。生活が苦しい，労働が厳しいといったことを多くの人が感じ取って問題を共有していく中から，問題を何とかしなければということでさまざまな運動が起こる。社会問題論は社会運動論に直結し，そこから社会政策へと展開していく，一つのルートがある。ところが，戦後社会学の台頭とともに流布していった社会病理学では，やはり犯罪などの「逸脱」的行為や，離婚などのような関係の「破綻」などが軸になります。「逸脱」的行為や関係の「破綻」は，それに巻き込まれた人々には大きな苦悩や苦痛が伴っているでしょうが，その結果現象に目を向ける多くの人々からは非難や糾弾を受けやすく，冷たいまなざしが注がれることが多いのです。これは，あくまで他者のまなざしであり，当事者の想いとかけ離れたものであったとしても，このまなざしを介して公の統制機関や調整機関，相談機関などに訴えられ，あらざるべき問題として処理される。これが，典型的な病理のイメージなのです。

だから，こうしたイメージの違いを念頭に置くと，両者を同じ地平で捉えることは困難になるの

ですが，真田是先生は社会問題論の立場から，社会問題と社会病理を統一的に捉える理論枠組みを提示されました。真田先生のいう「状態としての社会問題」と「行為としての社会問題」の区分がそれにあたります。生活の問題を基軸とする「状態としての問題」が基礎的にあり，その上に人格解体等を伴いながら，逸脱的な「行為としての社会問題」が派生的に出てくる，と真田先生は基本的に押さえられたのです。平たくいえば，「貧すれば鈍す」というわけなのです。

こうした区分の仕方を聞くと，私などは直ちにK.Marxの『資本論』にあります有名な一節，「一方における富の蓄積は他方における貧困の蓄積」，「貧困・労働苦・奴隷状態・無知・粗暴（野性化）及び道徳的堕落の蓄積」という言葉を思い起こします。「貧困・労働苦・奴隷状態」が物質的な貧しさを指すとすると，「無知・粗暴・及び道徳的堕落の蓄積」は精神的貧しさを指しています。この二つのものが並列的に連続的に書かれている。まるで物質的な貧しさが必ず精神的な貧しさを呼び起こすが如くに。それでは困るというのが率直な印象なのです。モノに恵まれない者がココロにも恵まれず，それで犯罪に走るのだとしたら，貧しい境遇に育ちながらも逞しく生き抜く人間たちのことを，どう捉えていいのか分からなくなってしまう。だから，私の場合は，物質的な貧困と精神的な貧困の間に斜線を引いて読むようにする。斜線を引いて，「貧困・労働苦・奴隷状態」のままに人々が放置されたとするならば，人間関係の解体を伴いながら精神的な貧しさが呼び起こされる可能性もあるのですよ，という読み方をする。そういう読み方をしないと，読み間違えるだろうというのが私の考えなのです。これを貧困化法則と呼び習わしていますが，これを法則と考えるのも好きではない。K.Marxの有名な言葉「資本の偉大な文明化作用」に倣って，これを「資本の醜悪な貧困化作用」というふうに，読み取っています。いずれにせよ，「状態としての社会問題」がまずあり，その中で人間関係の解体を伴いながら行為レベルの問題が出てくる。これが一つのとらえ方です。こういうとらえ方が適合する出来事はたくさんあります。現代においても，貧困が招き寄せた痛々しい出来事はいくつも指摘することができます。しかしそれだけでいいのかという問題が残るのです。

もう一方の雄，仲村祥一先生は，社会病理学の立場から，「社会体制の病理」という考え方を打ち出されました。仲村先生の言葉を借りれば，「病んでいるのは構造であり，見えているのは，その現象的結果である」のです。社会体制が病んでいる，その基になる構造が病んでいる。見える逸脱的な現象は，見えない構造の病を直接間接に映し出すものとして現出する。だから，社会病理学は社会の病んだ構造を剔出しなければならない，というわけです。魅力ある考え方です。けれども，どこまでそんなふうに言い切れるのかという疑問は残ります。たとえばナチズムに支配された戦前のドイツ，あるいは軍国主義におかされていた戦前の日本という体制を考えれば，今日の目から見れば，病んでいるのは構造であり体制である，と言い得るかもしれない。しかし，戦前の日本社会のことを考えましても，たとえば加賀乙彦が書いた『永遠の都』という戦時下の東京での庶民の生活を描いた小説を読めば分かるように，軍国日本の進軍ラッパが鳴り響く中でも，庶民はつましくひたすらに暮らしている。感動しますよね。そういう姿全部を，病んでいるのは構造という形で切り捨てていいのか，という気持ちがするわけです。だから，構造が病むとか社会体制が丸ごと病むと

か，そういう言い方は出来るだけ禁欲し，まず以って見えている現象的結果に注目しつつ，その背後に何があるかを探る。病んでいると一言で切りたくないので，構造の矛盾や亀裂，制度の軋みや揺らぎ，社会統制の過剰や弛緩という言葉を使って，見えている病理現象の背後に迫ろうと考えているのです。しかし，それにしても，仲村先生が指摘された，見えない構造に迫るという視点，また分析とはinvisibleなものをvisibleなものにする行為だという視点は，現代の社会病理学にも生かさなければならない大切な視点だと考えています。

2．社会学的パースペクティブの重視

70年代も後半に入りますと，「豊かな社会」化現象や「消費社会」化現象が次第に目に付くようになり，病理もまた，こうした社会の動向と密接に絡みあいながら生起するようになります。少年非行の増大と，その低年齢化や中流化が騒がれ，登校拒否やいじめ問題の増加が注目され，「金属バット殺人事件」に代表される子が親を殺す家庭内暴力や，「イエスの方舟」事件に象徴されるような，古い家を捨てて新しい共同性を志向する女たちの物語などが世間の耳目を集めるようになりました。こうした新しい諸現象に，古い理論枠組みを適用しようとしても，どうにもならない。「経済的に規定された生活の動かしがたい重さ」があるにしても，個々の人間の主体的な生き方にかかわる苦悩や苦痛に直接焦点を当てないと，見えるべきものさえ見えてこない。だから，生活というものを土台と上部構造とか，物質的貧困と精神的貧困とか，予め割り切って見ることは禁欲し，まずは現象として生じているものを観察し，行為や関係のあり方を見つめ，適切な理論枠組みを検討するという迂回作戦を展開した方がいいだろう，と次第に思い定めるようになりました。そこで，「生活とは，さしあたって，人間の意識・行為・関係の総体である」という立場に立ち，社会学的パースペクティブを重視して，諸現象を見る。そして，その現象を見るのに適した理論が過去にどうあり，現在どういうものが用意されているかを考える。いつの間にか，そういうスタンスを取るようになってきました。

では，社会学がどう問題や病理を取り扱うかということですが，それは社会問題の社会学的定義を見れば，明らかです。1940年代の早い時期に，R.C.FullerとR.R.Myersは「社会問題とは人々が社会問題だと考えるもの social problems are what people think that they are」という定義を打ち出しましたが，この定義はその後も社会問題とは何か，逸脱行為とは何かが問われるたびに，振り返られる有名な定義なのです。一見，トートロジーに見えるかもしれませんが，ここでは社会問題だと考える人々の主観が重視されています。1960年代にラベリング理論を唱えたH.S.Beckerが，「逸脱行為とは人々がそのようなレッテルを貼った行為のことである deviant behavior is behavior that people so label」と述べたのも，ある行為を逸脱だと考え，そのようなレッテルを貼ったということなのですから，レッテルを貼る人々の主観が重視されていることに変わりはありません。このように社会学は，問題を構成する客観的状態とともに，人々の主観的定義を重視する。ここに大きな特徴があるのです。

そこで直ちに，次の二つの研究方向が示されます。一つは，なぜ人々はある現象を問題だと考えたのか。人々はどういう価値意識，規範意識を持って，その現象を問題だと考えたのか，それを明らかにすることです。なぜマリファナは禁止され，マリファナを吸う人は危険視されるのか。マリファナを禁止する法案はどのようなプロセスを辿って形成されたのか，等々をきっちりと考えていくわけです。これは，端的にいえば，日常性を彩るイデオロギーの研究であります。人々はどんなイデオロギー，どんな社会意識を持って日常生活を送り，どういう状態を問題や逸脱だと考えるのか。人々の考え，そのイデオロギーの正当性については意見を留保しつつも，まず以って人々の声に耳を傾けるところから出発する，それが経験社会学の出発点となったのです。

人々の主観的定義を重視するという点では，今日流行っている構築主義やラディカル構成主義も，似たような立場に立っています。たとえば，虐待の概念はいかにして形成され，児童虐待が社会問題として構築されていくのか。ストーカーという言葉がいかにして生み出され，ストーカー現象が社会問題として見つめられるのか。統計的に見ても面白い現象が出てきます。虐待，ストーカーという言葉が新聞紙上を賑わし，通告義務を伴った法制化が図られていくと，そのような現象が増えていく。この現象は問題ですよという異議申し立てがなされ，それが社会問題として構築されるプロセスの研究，こういう研究の方向が，社会病理学の中の一つの潮流となっています。

しかし，やはり，問題を構成する客観的状態の研究を等閑にするわけにはいかないでしょう。問題の社会的構成というのは，その問題を問題として組み立てる要因連鎖とかコンテクストの問題を離れて，捉えることは出来ないでしょう。現代の集合意識や社会構造の状態が逸脱行為のありようを規定している，その関係性の問題を考察することなくして，社会病理学が己の使命を果たしうるなどと考えることは出来ません。したがって，人々の主観的定義と客観的状態の双方を視野に入れて，研究を進める必要があるのです。

ただし，実際に現実分析を行って，人間の生き方を見つめようとするのであれば，今という時点，ここという地平で，この二つの動向がどう捩れ，歪み，現代の「不幸」を産出するに至ったのかを，社会病理学はきちんと描かなければならないでしょう。そのためには，ある人を逸脱へと push する要因，pull する要因，過去からどうその人が規定された形で現在生きているか，現在をいかに未来につなげようと思って未来への投企を行うのか。儀礼的な実践，演技という問題を，この人はどのようにやっているのか。他者が様々なまなざしを注ぐとすれば，そのまなざしを操作する形で，その人はいかに状況に適用しようとしているのか等々，こういう主体の意識と行為に絡まった一連の要因をきちんと見ないと，生きた学問にはならないでしょう。よく社会構造と逸脱ということで，R.K.Merton の研究などがその典型ですが，構造によって逸脱へと人間はいかに push されるかという研究がありますが，それだけでは不十分だと私は見ています。人は環境によって形成されますが，その環境をいかに生きるかという問題もあるのです。この点を丁寧に追いかけないと，社会病理学は生きた学問にならないだろうと感じています。

3．「病理」の復権

ところで，「病理」という言葉は，「正常」や「異常」の対概念として，「良くない」「悪い」という露骨な価値判断を伴っています。経験科学としての社会学は，多くの人々がそう判断しているのであって，私が個人的にそう判断しているのではない，多くの人々の判断の正当性については意見を留保しつつも，さしあたりその判断を尊重して研究を始めるのですよと，客観的なスタンスを持っているように見せることが出来ます。けれども，多くの人々とともに私が，その価値判断に従って研究対象を選択しているのである限り，研究者としての私もその価値判断から自由ではあり得ない。だからこそ，多くの社会学者――とりわけ若い研究者――は「病理」と言う言葉を忌避して，「問題」という言葉を好みます。日本社会病理学会も，英語名は Japanese Association of Social Problems となっており，Social Pathology ではなく Social Problem を使います。ここには，価値判断の露骨さが明白な言葉を避けるという気持ちがふくまれています。けれども，社会学的社会問題論が行為や関係の逸脱，脱線，破綻，日常の秩序を攪乱するような諸現象を好んで取り上げるのは確かです。そういう現象を取り上げるわけですから，たとえ人々の声を介してであれ，そこに価値判断が前提されていることは疑いない。人々とともに私も，どこかで価値判断していることを自覚するためにも，あえて「病理」という言葉を使うことには意義がある。また「病理」と「問題」の構築のされ方の違い，両者のイメージの違いに自覚的であるためにも，「病理」という言葉をあえて使うことには意味がある。私は，消極的な言い方ですが，そう考えています。

ただし，その場合，次の諸点に注意する必要があります。第一に，「病理」は我々が生きる日常世界の内部に生成・発展するものであり，酒鬼薔薇聖斗であれバスジャック少年であれ，外部から我々の社会の中に侵入してきたわけではありません。当たり前のことなのですが，「病理」は我々が生きる日常世界から生まれ出るものであり，外部にあって我々を脅かすものではないのですから，病理的出来事もまた我々の隣人の起こした出来事であり，そこに落ち込む陥穽は我々の前に日常不断に用意されている，とみなければなりません。だから第二に，日常生活は病理的なものも病理的でないものも，さまざまな形でひっくるめてあるのですが，同時に，「病理」と「正常」を二律背反的に語るのではなく，「正常」の背後に「病理」が潜み，「病理」の内部に「正常」が宿る，といった日常世界の複雑性に目を注ぐ必要があります。「正常」の背後に「病理」が潜むことは，「真面目」な少年の「狂気」を見聞する今日では，当たり前のこととして了解されましょうし，「病理」の内部に「正常」が宿ることがないと，人は救われません。その意味で，これもまた当たり前のことなのですが，当たり前のことを当たり前にきちんと意識しておくことが，マスコミ情報の発達した今日ではきわめて重要だと考えています。

第三に，人間の価値判断は現実には多様に揺れ動き，状況に応じて可変的であることを踏まえておく必要があります。殺人が常に犯罪であるとは限らないこと，戦場にあって人を殺すことが英雄であり，自爆テロをやって人を殺したら殉教者になるという意味づけがあるということ，すなわち

一つの行為の意味は状況に応じて可変的であるということは，社会学的常識に属しますが，ここで言おうとしていることは少し違って，いわば出来事との距離に応じて想いが違うということなのです。殺人であれ何であれ，殺した側，殺された側の父や母の想いがあり，兄弟姉妹の想いがあり，友人や隣人，先生の想いがあり，そして，そうした想いのずっと先にマスコミの報道があり，視聴者の反応がある。その事件に巻き込まれた当事者の目とは異なる他者の目，そうした目をもって，正義や人権を振りかざして，他者を裁く非情な目，そうした目をマスコミ報道に感ずることも多いのです。けれども，出来事は一般に，それを構成する具体的内容が明示されればされるほど，善し悪しの一般的判断では片づかない全体像を提示し，「かくなって他とならなかった」現実の悲惨や不幸を語ります。いい報道というのは，様々な想いの錯綜のうちに，この全体像を提示し明示するものでありましょう。生きた社会学に求められるのも，これなのです。

4．「病理」の誘惑

さて，これまで消極的な意味で，「病理」という言葉の復権について語ってきました。しかし，もっと積極的に「病理」という言葉の磁力について考えたい。「病理」の誘惑，それはもはや言葉の問題というより，「病理」という出来事の本質に関わる問題なのです。

まず第一に，病理的な出来事というのは，それが制度的秩序を撹乱するものであるだけに，極めてインパクトが強いという特徴があります。その強いインパクトの影響で，それまで自明視されていた日常的世界の枠組みが問い直され，常識という名の自明性のベールが剝ぎ取られ，そのベールの下に包み隠されていた見えざるものが暴かれる，ということが起こりえます。E.Durkheim は，近代の自殺の増加の中に，人間の欲望を無限に増殖させるアノミーや自我の肥大を招くエゴイズムの風潮を読み取りましたし，R.K.Merton は，アメリカ的犯罪の増加を通じて，社会規範が文化目標達成のための制度的手続き規定として形骸化されている状態を読み取っていたに違いありません。私の好きな動物行動学者 K. Lorenz は「知識の源泉としての社会行動の病理的混乱を利用しなければ，人間の社会行動というシステムに対するいかなる洞察にも至れない」と申しました。かかる「病理」の強いインパクト，ここに人間行動の，そして社会秩序の，秘密を解く鍵が隠されているのです。

もう一つは「病理」の運命性。日常を生きる我々は，儀礼的実践に努めるばかりではなく，目的意識的な戦略的行為を実践します。「こんにちは」と挨拶をして，相手が「こんにちは」と返し，相互に「僕たちは友だちだよ」と確認する儀礼的実践の合間に，あるいは儀礼的実践を通して，相手を出し抜いたり欺いたりする戦略的行為を嵌め込みます。相手との関係性を確かめながら，自らの欲望や目標の達成をめざすというのが，多くの人々の日常不断の生き方だと思われますが，しかしなお予期し得ない（人・もの・こととの）出逢いもまた日常不断のものである，といわなければならないでしょう。日常的に予期しうる物事の範囲は必ずしも広くはなく，私の外，あるいは親密な人々との交渉の外に出れば，予期し得ない出来事に遭遇する機会が増えるから，生活は刺激に富

み，人生は意外性に満ちている，とも言い得るのです。けれども，予期し得ない（人，もの，ことの）出逢いは現在に問題を投げかけ，未来に影響を及ぼすことがあり得ます。E.Goffman のアクション論に倣って，これを「運命性」と呼びたいと思いますが，差し迫る運命にいかに対処するかは，儀礼でもなければ戦略でもない，その時々の人々の決断によっています。過去の体験によって語られ，未来への想いによって誘導され，現在の状況判断によってもたらされる決断が，次に取るべきアクションを決定するのです。その意味では，人間は，その時々に，さまざまな決断を迫られて生きている。社会学はこれをどう語るか，運命的な出逢いと別れを社会学は語り得るのか。これが社会学の難問なのです。

「病理」という出来事は，この運命性に満ちています。病理的な出来事に巻き込まれた人々には，加害者であれ被害者であれ，スティグマが刻印されトラウマが残り，生活の連続性が絶たれ，人生の意味が激変する，といったことがあり得ます。運命の予兆，あるいは運命を担うことになった行為者の救いの叫びが，予め聞き取れなかったのかどうかということが問われることがありますが，予兆というのは回顧的に知られることが殆どなのです。予め知られていたら，運命は回避でき，運命は運命でなくなる。運命を担うようになった限りで，運命の予兆は回顧的なものに過ぎないのです。だから，いつまでも，なぜという疑問符が駆け巡り，もしもという仮定法が付きまといます。親の嘆きの中に，友の想いの中に，こうした疑問符と仮定法が埋め込まれています。さて，これに対して，社会学は何が言えるのでしょうか。

おそらく，沈黙と了解。社会学に為し得るのは，これしかありません。その人の語ることを黙って聞き，相手の胸の内を了解することしかありません。L.Wittgenstein になぞらえて，「語り得ぬものの前で，人は沈黙を守らなければならぬ」と言い得るのですが，沈黙を守りつつも了解することは出来る。そして，この了解を押し広げ，かの疑問符と仮定法を社会学的地平で引き受けて，過去から現在へと繰り返される人生のドラマの社会的コンテクストを明らかにすること，あるいはコンテクストのコンテクストを明らかにすること，それが社会病理学の仕事だと言い得るのかもしれません。人生をドラマだと言い得る時，そのドラマを構成する最大のものは運命性であり，運命性は日常性を切断することによって，見えざる世界の地と図を浮き彫りにします。この地と図との関連でアクションの悲劇と喜劇を読みぬくことが，社会病理学の重要な使命だと思うのです。

終わりに
――社会病理学の危機――

さて，これまで社会病理学の復権や魅力について語ってきましたが，実際には，とりわけ90年代以降，社会病理学の危機について語られることが多いのです。昨年の日本社会病理学会のシンポジウムにおいても，会長自らが社会病理学の危機を訴え，かつては法律学が，現在では心理学が，社会病理学に取って代ろうとしている，と述べていました。確かに，そのように読みとれる現象は多々あります。まず「脱」あるいは「非」社会的行為の広がり。「非」というのは社会的なものから

目をそむけ，自らの内部にこもるような行為を指しますし，「脱」というのは社会的なものが抜け落ちて，その時々の自己の欲望に忠実な，あっけらかんとした行為を指すのに使われますが，こうした行為群が広がりますと，「病理」的諸現象の背後に社会的なるものの矛盾や相克を見ようとする営み自身が空しくなる，ということがあるようなのです。また，消費文化の台頭とともに，歴史や伝統や風土といった，かつての生活文化を彩った内容が漂白され，記号化された商品文化が市場を席巻するようになりますし，この市場は更に人間の内面に目を向けて，個性的であることや自分らしくあることを喧伝し，私探しや私物語の耽溺へと人々を駆り立てているようなのです。こうした時代状況に流されてのことなのか，逆らってのことなのか，引きこもりやリストカット，摂食障害といったことどもが注目されるようになり，「こころの傷」とか「こころの闇」とか「こころの病」といった言葉が独り歩きを始め，「病理」の医療化や心理化に拍車をかけるようになる。医療化・心理化された「病理」は，個別的な臨床の対象になり，社会学的・社会病理学的診断は迂遠なものとして敬遠されるというわけなのです。

けれども，これもまた，「かくなって他とならなかった」時代・社会の「性格」なのです。社会の「消費社会」化や情報化の進展に伴うヴァーチャル・リアリティの浸透，さらには既存の社会システムの揺らぎや亀裂等々といった諸要因が複雑に絡み合って，現在の状況を形成しているに違いありませんが，それを具体的に解きほぐすためにも諸現象に立ち返り，その観察を通して具体的な現実社会の像を描き切らなければならないでしょう。いわば，諸現象の説明モデルが医療化・心理化する社会の状況そのものが，社会学的な研究対象にならなければならない，ということでもあるのです。かつて戸坂潤は，軍国主義という，集合意識が内部に向かって収斂する時代状況下に，「社会生活の臨床的徴候」としての「風俗」の研究を薦めました。今日のように集合意識が拡散し，社会的なるものの意味と価値が見失われつつある時代状況下にあっても，「脱」「非」社会的な衣をまとう「風俗」の研究に乗り出す必要がありましょう。同時に，J.Baudrillardが示唆するように，こうした時代状況下には，虚無と死の影を曳きずる病理的な出来事が，我々の日常生活のただなかに突如舞い落ちるということもあるのです。この両者を視野に入れ，社会の「運命」を人間の「運命」に被せながら，社会病理学は――社会学ともども――時代診断の学として，自らの理論的武器を鍛えなければならないでしょう。そしてこれが，社会病理学をやるように「運命」づけられた私の社会学的信念でもあると申し上げて，この講演を締めくくらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

〔講演資料〕

社会病理学への道

はじめに
――自分史の試み――

自分史＝「かくなって他とならなかった」自分を過去の「事実」に照らして構築する試み
　私という物語＝現在の時点から過去の出来事を組み合わせて自己了解する試み
　　誕生の秘密――生育の秘密→現在の自己像
　①父と母の出会い――大本教と満州（大連）
　②学生時代――政治の季節――60年安保と学園紛争
　　現代社会研究会と戸坂潤研究――「問題の理論」「性格の理論」
　　“理論は凡て，それを動機づけたそれに固有な問題に遡ることによって，そしてただ其処からのみ，その性格を把握されるべきである”（戸坂潤）
　　社会学を動機づけた固有の問題＝「社会と個人」問題
　③立命館大学へ
　　社会問題研究から社会病理学へ

1．社会問題と社会病理

イメージとしての両者の差異
　社会問題――「生活」の問題――苦悩や苦痛――問題の共有――社会運動へ
　社会病理――逸脱的「行為」――非難・糾弾――他者のまなざし――統制機関へ

両者の統合の試み
　「状態」としての社会問題――社会問題の基礎構造
　「行為」としての社会問題――社会問題の派生形態（真田 是）
　　“貧困・労働苦・奴隷状態／無知・粗暴・及び道徳的堕落の蓄積”（Marx, K.）
　　（物質的貧しさ）　　（精神的貧しさ）
　　“貧すれば　　鈍す”
　　“衣食足って　　礼節を知る”

「社会体制の病理」
　“病んでいるのは構造であり，見えているのはその現象的結果である”（仲村祥一）
　　見えている「病理」現象→構造の矛盾や歪み，統制の過剰や弛緩
　　分析とは，invisible なものを visible なものにしていく行為

２．社会学的パースペクティブの重視

「豊かな社会」化や「消費社会」化が語られる状況下では，次第に“経済的に規定された生活の動かしがたい重さよりも，個々の人間の主体的な生き方にかかわる苦痛や苦悩に焦点を当てる”研究が重視される。社会問題の社会学的研究。

生活とは，さしあたって，人間の意識・行為・関係の総体であるという立場

ただし，この場合，何が問題かに関しては，人々の主観的定義が重視される。

“社会問題とは人々が社会問題だと考えるものに他ならない”（Fullar, R.C & Myers, R.R）

“逸脱行為とは人々がそのようなレッテルを貼った行為のことである”（Becker, H.S）

そこで直ちに，次の２つの研究方向が示される。

①人々はある現象を何故問題だと考えたのであろうか。人々の価値意識や規範意識の問題。日常性を彩るイデオロギーの研究。その正当性の問題等々。

②その問題はいかなる状況下に生成・発展したのであろうか。問題の社会的構成。問題を組み立てる要因連鎖やコンテクストの問題。社会構造と逸脱行為等々。

そして，現実分析を試みるのであれば，今という時点，ここという地平で，上記二つの動向がどう捩れ，歪み，現代の「不幸」を産出するに至ったのかを描かなければならないであろう。そのためには，push 要因と pull 要因，過去の呪縛と未来への投企，儀礼と演技，他者のまなざしとまなざしの操作等々，といった主体の意識と行為に絡まる一連の要因を探ることが重要であろう。

３．「病理」の復権

「病理」という言葉は，「正常」や「健康」の対概念として，「良くない」「悪い」という露骨な価値判断を伴っている。したがって多くの社会学者――とりわけ若い研究者――は，「病理」を忌避し，「問題」を好む。しかし，社会学的社会問題論が行為や関係の逸脱，脱線，破綻等々を取り上げる限り，たとえ人々の声を介してであれ，ここに明確な価値判断が前提されていることは明らかである。これを自覚するため，「病理」という言葉をあえて使うことには意味がある。また「問題」と「病理」の構築のされ方の異同を意識するためにも有力である。ただし，この場合，次の視点が重要である。

①「病理」は，我々の生きる日常世界の内部に生成・発展するものであり，外部にあって我々を脅かすものではない。同じく「病理」は，我々の隣人の起こした出来事であり，そこに落ち込む陥穽は我々の前に日常不断に用意されている。

②したがって，「正常」と「病理」を二律背反的に語るのではなく，「正常」の背後に「病理」が潜み，「病理」の内部に「正常」が宿る，といった日常世界の複雑性に注目する必要がある。

③ただし，人間の価値判断は現実には多様に揺れ動き，状況に応じて可変的であることに注意する必要がある。出来事は一般に，それを構成する具体的内容が明示されればされるほど，良し悪しの一般的判断では片付けられぬ全体像を提示し，「かくなって他とならなかった」現実の悲惨や不幸を語りだす。これを明示し・提示することが社会学には求められている。

父や母の想い，兄弟姉妹の想い，友人の想い，隣人の想い，先生の想い

そして，そのずっと先にマスコミの報道姿勢があり，視聴者の反応がある。

4．「病理」の誘惑

「病理」的出来事のインパクト

“知識の源泉としての社会行動の病理的混乱を利用しなければ，人間の社会行動というシステムに対するいかなる洞察にも至れない”（Lorenz, K.）

日常世界を取り巻く自明性の壁，それを撹乱して見えざるものを暴く作用

制度に根ざし，集合的な意識として流布し，ハビトスとして体得され，常識として自明視されている日常性の壁の撹乱

「病理」の運命性

日常を生きる我々は儀礼的実践に努めるばかりではなく，目的意識的な戦略的行為を実践するが，しかしなお予期せぬ（人・もの・こととの）出逢いは日常不断のものである。この出逢いが現在に問題を投げかけ・未来に影響を及ぼす「運命」的なものであったとしても，これにいかに対処すべきかは，過去の体験によって語られ・未来への想いによって誘導され・現在の状況判断によってもたらされる決断にかかっている。

「病理」的な出来事：「運命」的な出逢いと別れ－生活の連続性の切断，意味の激変

「運命」の予兆――なぜという疑問符，もしもという仮定法――沈黙と了解

人生というドラマの一部，人生のドラマ性を浮き彫りにする「病理」

終わりに
――社会病理学の危機？――

「脱」「非」社会的行為の広がり，歴史や伝統や風土の漂白，「私」物語への沈潜・自閉

「こころの傷」「こころの闇」「こころの病」――精神科医の世界へ

病理の医療化・心理化，「臨床」の重視

「リアリティが胸焼けする時代」（藤原信也）から「リアリティが感じ取れない時代」へ

身体（肉体）への固着とヴァーチャルな世界への耽溺

されど，「意味への渇き」（竹内芳郎），「特別な自分への憧憬」（土井隆義）

「大きな物語の喪失」「他者性の喪失」，社会と個人の「フラクタル性」（Baudrillard, J.）

されど他方の極に，虚無と死の影を引きずる「幻影的スペクトル性」の登場

自我の分裂や拡散，他者への配慮の欠落：唯我独尊

だが，これもまた，「かくなって他とならなかった」時代・社会の「性格」を物語る。社会の「消費社会」化やヴァーチャル・リアリティの浸透，さらには社会システムの揺らぎや亀裂等々といったことと，これがどう絡まっているのか。集合的な意識の状態を中心にして，さらに研究を深める必要があるだろう。そのためにも，

「社会生活の臨床的徴候」（戸坂潤）としての「風俗」の研究

社会システムを撹乱し「運命性」に満ちた「病理」の研究

が，ますます重要になっていると考える。

参考文献

戸坂潤，1966，「『問題』に関する理論」，『戸坂潤全集第２巻』，勁草書房

真田是，1978，『現代社会問題の理論』青木書店

中村祥一，1967，『社会体制の病理学』汐文社

Fullar, R.C. & Myers, R.R. 1941, “Some Aspects of Social Problems”, A.S.R. vol6

Becker, H.S., 1963, Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance, Free Press

Lorenz, K.,1973, “The Fashonable Fallacy of Dispensing with Description”, In Evanz R. I., Konraad Lorenz: the man and his ideas

Baudrillard, J. & Guillaume, M., 1992, FIGURES DE ALTERITE, L’Association Descartes（塚原史＆石田和男訳，1995，『世紀末の他者たち』紀伊國屋書店）

〔資料〕

佐々木嬉代三教授　略歴と業績

１．略　　歴

1939（昭和14）年９月12日　中国・大連市に生まれる。
1958年３月　滋賀県立膳所高等学校卒業
1965年３月　京都大学文学部哲学科（社会学専攻）卒業
1965年４月　京都大学大学院文学研究科社会学専攻修士課程入学
1967年３月　京都大学大学院文学研究科社会学専攻修士課程修了
1967年４月　京都大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程進学
1970年３月　京都大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程単位取得退学
1971年１月　立命館大学産業社会学部助教授
1982年４月　立命館大学産業社会学部教授
2005年３月　立命館大学産業社会学部定年退職

主な学内役職歴

1990年４月～1992年３月　教育科学研究所長
1995年４月～1998年３月　常務理事（学生担当），学生部長
1999年１月～2004年３月　副総長・副学長
1998年４月～2005年３月　大学コンソーシアム京都運営委員長

２．学　　位

社会学博士
専門分野／社会学，社会病理学，文化人類学
研究課題／日本の犯罪と非行の研究

３．主な研究業績（1990年以降に限定）

著　　書

（１）編著『変貌する社会と文化』（法律文化社　1990年）
（２）編著「転換期の社会と人間」（法律文化社　1996年）
（３）単著「社会病理学と社会的現実」（学文社　1998年）
（４）編著「社会病理学講座　第２巻　欲望社会――マクロ社会の病理」（学文社　2003年）

学術論文

（１）単著「家族崩壊の社会学的背景」『家族の崩壊』（ミネルヴァ書房　1999年）

（２）単著「社会病理現象からみた戦後50年」『戦後50年をどうみるか（下）』（人文書院　1998年）

（３）単著「社会病理学的実証研究の理論化に関する諸問題」『現代の社会病理』（日本社会病理学会　1997年９月）

（４）単著「「豊かな社会」の犯罪――現代の犯罪に関する一考察」『立命館産業社会論集』（1994年12月）

（５）単著「貧困と犯罪――現代の犯罪に関する一考察――」『立命館産業社会論集』（1994年６月）

（６）単著「移住民問題を通して見た沖縄と日本」『立命館言語文化研究』（1994年３月）

４．所属学会

関西社会学会

日本社会病理学会

日本社会学会

５．社会的活動

大学コンソーシアム京都運営委員長

大学基準協会判定委員

三重大学経営協議会委員

日本社会病理学会理事